

コットン畑での活動スタート

昨年度、一般社団法人ふくしまオーガニックコットンプロジェクト(略称 ふく・わた)として、歩み出したコットン栽培。本会もその仲間の組織の一つとして、小名浜上神白の伊藤農園での栽培を中心に進めています。

上神白のコットン畑での今年度最初の動きは、例年と変わらず「みんなの畑」のメンバーの皆さんの手で進められました。原発避難者の方たちを中心に構成されているこのメンバーは、毎月第2金曜日に集まってきて、コットン畑の手入れと有機での野菜栽培などを行っています。

今年度最初の回となった4月8日。いつものメンバーが顔を合わせ、早速野菜の種蒔きを行いました。このメンバーが、来月には今年度コットン栽培に参加するいわき市内の小中学校の児童生徒の皆さんのために、ポット苗作りなどのお手伝いも行ってくださることになっています。「みんなの畑」のメンバーは、今やコットン栽培を支える大切な仲間になっているのです。なお、今年度の小中学校でのコットン栽培の事業は、今年度「いわき市明日をひらく人づくり事業」の助成を受けてふく・わた主催の事業として行われ、本会としては栽培指導のお手伝いを行うことになっています。



▲みんなの畑 作業の様子

3月16日地震被災支援に

3月16日深夜の大きな地震により、福島県浜通りの北部と中通りでは大きな被害がありました。東日本大震災以降、令和元年東日本台風と今回の地震の被災と度重なる災害に、被害の大きかった地域では被災者の心が折れてしまうことも懸念されています。幸い、いわき市は比較的被害が少なかったのですが、急な災害で廃棄処分せざるを得ないパンが大量に出ているとの情報を得て、本会ではフードバンクとして福祉施設で活用頂くために動きました。

一方、この地震の後、フードバンク用の食糧庫とチャリティショップの店舗にしているプレハブ、古着ストック用の倉庫の屋根に亀裂が入り、雨漏りがひどくなってしまいました。修理費用に頭を悩ませている時に、フィッシュファミリー財団・JWL I様からありがたい支援のお申し出を頂き、無事に修理を行うことが出来ることになりました。

「足りない×余っている」を分かち合いで解決！ フード&クロージングバンクがある優しいまちづくり

3月21日、いわき駅前ラトブ6階のいわき産業創造館を会場に、フード&クロージングバンクについてのPRイベントが催されました。このイベントは、生活困窮に陥った方々を「食」と「衣」の両面から支える仕組みのすそ野をもっと広げようと企画されました。

午前中は、SDGsカードゲーム体験会。小学生から80代まで、30名ほどが参加して社会・環境・経済のバランスが取れた在り方を学びました。そして、午後からは、「衣」と「食」に関する分かち合いをテーマとするパネルディスカッション、ピープルの古着を学生の手でアップサイクルしたファッションショーの動画上映、演劇仕立ての着物ファッションショーと盛りだくさんのステージイベントが続きました。

特に、着物ファッションショーにはふたば未来学園演劇部と有志の生徒さんが出演。2日前からの集中練習の成果を披露しました。また、ステージの裏方を支えてくれたのは、東日本国際大学の学生有志の皆さん。地域の若者たちと作り上げたステージには大きな拍手が送られていました。



▲イベント会場の様子▲

定期総会の開催のお知らせ

※コロナウイルス感染拡大が未だ収束しないため、昨年に引き続き書面決裁という手法で進めてまいりますのでご了承のほどお願いいたします。

私たちの活動を会員として支えて下さい。
会費納入をよろしくお願い致します。

活動会費 (実際に活動に参加される方と、会報購読という形で支援して下さる方) 2,000円/年
賛助会員 (資金的な面から支えて下さる方と法人・団体会員) 10,000円/年

郵便振替 (02110-0-24908) でお送り下さい。

「何という料理ですか」「作り方教えてください」「何を簡単に料理しなさい」「何を簡単に料理しなさい」など、簡単な料理が作れない私達が感動の輪が広がっていることに幸せを感じます。

(甘)

つぶやき

料理は得意じゃないけれど

最近のテレビ番組は料理に関するものが多くその内容に感心するばかりである。コロナ禍によるお家時間が多くなったことが影響しているのだと思う。▼ところで私は料理に関しては全く自信がない。小学生時代母が入退院を繰り返していたから弁当は自分で作っていかねなければならなかった。おかずはご飯の間に納豆を敷き詰めた。おかずは簡単な物が多かった。時々スルメを焼いて醤油につけて混ぜたものやイナゴなどの日もあった。隣の席の子の弁当は毎日大きな玉子焼きや塩ひきを真ん中にドンとのせた旨そうな弁当だった。又当時珍しかったパンを毎日購入して登校する同級生も居た。凄い金持ちなんだと羨ましく思ったものである▼本会では東日本大震災が起きた時いち早く災害ボランティアセンターを立ち上げた。各学校の体育館や公民館は津波被災者で溢れていた。当初は行政からお振りや弁当が届いていた。私達にできる支援は何かと走り回っていたとき偶然出会ったのが熊本県のNPO。その事務局長さんから夢のような話を聞いた。住民自身食事を作ることを条件に料理に使う機材一式を提供するというもの。話しはどんどん進み食材も毎日届くシステムが整った。支援は2か月間続き、約2万食を提供する事ができた▼全ての支援が終わったとき事務局にはスープ50人分を作れる大鍋数個が戻ってきた。その後大鍋はあらゆる支援時に使われることとなった。元来料理が得意でない私が作る料理だから我慢できるものではない。野菜10品目を小さく切って、トリの挽肉等と一緒に煮込むだけ。柔らかくなった片栗粉でとろみをつけ、塩コショウで味付け。最後に全体に溶き卵を回す。ゴマ油を垂らせれば仕上がり。このスープは大震災時の時は勿論令和2年のいわき市を襲った台風19号の被災者支援の時に提供し喜ばれた。こんな美味しいスープは生まれて始めてだ。